



あたらしい知識をコンパクトにまとめる 「義 足」

児玉俊夫監修／武智秀夫・明石謙著

よい本が出たものである。義足について、いまのあたらしい知識をよくコンパクトにまとめられている。整形外科医にも、リハビリテーションをやる人にも、実際に義足をつくる側の人にも、ぜひ1本の備えつけが望まれる。

義肢方面におけるわが国のおくれかたは、著者も指摘されるように、実に医学と工学において世界の一流に伍し、その高度成長ぶりに耳目をそばだたしめている国の実状としては、ほとんど信じることのできないくらいひどさである。こういう事態をまねいて恬然としていられたのは、日本の医学界にも工学界にも、いかにも中進国らしい、いろいろの事情があった。つづめて言えば、人まねに終始してはばからなかった学

問のすすめかたと、目さきの利益追求のほか考えることのない製作者側と遅れおくれでなければ腰をあげない行政指導側等々。これは戦争中からこの方面に関係していた私どもの責任であるともいえそうであるが、独力をもって手を染めるには、あまりにも周囲の病根はふかく、整形外科の分野の中においてさえその機運が向いてこなかったのであった。

著者らも専門家であるとはいえ、整形外科領域の中でも陽のあたらしぬ場所に手をおろすには、いくたびかちゅうちょされ、しかもやむにやまれぬ気持をもってあたられたに違いない。おそらく義憤ともいえる気持ちにさえかられたこともあったろう。そのような部面を労をいとわず、よくもこのようにまとめあげていただ

いた。おそらく戦中戦後にいち早く義肢問題にあたられた児玉教授が、よく慇懃指導されたこともあったろうと、そちらにも大いに敬意を表したい。

本の内容としては、よくできた手引き書の性格もあり、日本のこの方面の欠けた文献を埋める意味もあるが、それよりも実際の関係者にとっては、この方面の知識を網羅した辞書的なものとしての価値をたかく買いたい。願わくば、ひきつづいて、義手とその関連方面にも筆を労していただきたいと思うのは、無理なお願いであろうか。(A5, 265 ページ, 図 212, 写真 94, ¥ 2200, 医学書院刊)

(大阪大学教授 水野祥太郎)